

## 【講演記録/東方斎・荒尾精先生追悼式】

東亜同文書院を世界初の国際的ビジネススクールへ  
構想した荒尾精の原点

愛知大学名誉教授（地理学）、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長 藤田 佳久

(2023年11月4日、京都の熊野若王子神社)

## はじめに

皆さん、こんにちは。今日はほんとに快晴のいい天気です。京都にとっては観光日和になると思いますけど。広く考えていただいて、これも京都での行事の1つだと思ってご理解下されば大変ありがたいというふうに思います。今日は鹿児島からの方もお見えになったりして、結構広くご参集いただいて、少し私の講演というか講義を聞いていただけるというのは大変ありがたく思います。ここは若王子神社です。雑談すると少し時間をとってしまいますけども、雑談のほうが良いという人もいますね。

そこで少し雑談をします。この前の道はずっと左のほうへ行きますと、同志社大学の新島襄のお墓があります。ちょっと上った所に。新島襄と荒尾精の関係もあります。新島襄が同志社を卒業して網走の刑務所の教誨師になって赴任する時に、唯一尊敬している荒尾先生というのでご挨拶に来られた。色々話をした後で新島青年に、頑張れよと、揮毫として「石鱗」という文字を大きく書いて渡したのです。何で書いたかと言うと、「石鱗」というのは自分の身を削って相手を綺麗にする。そういう精神が東亜同文書院の教育であったということで、新島襄にそういう発想を伝えたのですね。こ

れを受けたのが書院院長になった根津一です。表現は違いますけど、根津さんは本日のテーマではないのですが、言ってみればマックス・ウェーバーが著した「プロテスタンティズムと資本主義」というのにより近い考え方です。プロテスタンティズムの色々な制約条件、倫理的な条件です。そういうベースでもって資本主義をやりなさいと示した。荒っぽく儲けるという、最近の新資本主義などではない倫理を主張したのです。そういう点では、アジアにおけるマックス・ウェーバーと言いますかね。根津院長も荒尾さんに次いで継承した人なのです。そういう精神が新島の心を打ったのです。ちなみにもう1つ言いますと、4月の最初、新島襄のお墓を参拝に同志社大学の学生が各学部別にバスで来て旗にリードされながらここへお参りに来るのです。この前の道を通って。これで同志社大学は学生たちに同志社に入ったという精神の刷り込みをやるのです。

そういう点で愛知大学も是非その辺をお考えいただきたいと思います。例えば今日も話がありましたけど。入学式の時に、学長から新入生に愛大の出自とその精神の歴史をご紹介いただくとありがたいということです。記念センターのほうへは色々な卒業

生もたくさん来られて、愛大にこういう歴史があったとは知らなかったという声が圧倒的に多いのです。これをもっと早く知っていたらもっと勉強したのという一言が必ず付いています。そういう点では、大学の歴史を知ると知らないとは大きな違いです。愛知大学精神というか愛知大学の魂というか、荒尾精から始まって本間先生継承で今日まできている流れを知らしめるべきだと思います。私もずっとこの点に関してはその通りだと思っております。

私は愛大に赴任してから 40 数年ぐらいたちますけど。最初に愛大へ来た時には、私は文学部地理学教室へ着任しました。真っ先に図書館へ行って色々書物類を見る中で、書院生が 3 か月から 6 か月、足で歩いた大調査旅行。調査という言葉を使っていませんでしたが、「大旅行」です。決して観光旅行じゃないです。これは。調査旅行で清国の経済というものをきちんと把握する。教育の一環で、そこに膨大な書院生の記録が埋っていました。荒尾精は後でも言いますが、日清間の貿易でもって両国がウィンウィンの関係になれば、列強の進出に対して清国は抵抗できるし、列強はその先に日本を狙っているから、日本としても大きな防波堤を作ることができるというような論点を提示していった方なのです。そういう意味で言いますと、まさに東アジア全体を射程に入れて対欧米との関係。特に敵対というわけではないにしても、きちんとした対応策を日本及び清国が作れば東アジア安定に役立つ。そういう発想を持った方だと思います。そういう点で、今日はテーマちょっと長いですけども。東亜同文書院と世界初の国際ビジネススクールへ構想した荒

尾精の原点をお話ししてみたいと思います。

## I 荒尾精

荒尾精という人は尾張藩の出身です。生まれはいくつか説がありますが。1つは西枇杷島町。今合併をしましたけど。もう1つは名古屋市西区辺りというふうに言われております。これは関係本を読んでもいくつか説があります。先ほど申しましたように、私が 40 数年前に愛大へ来て書院生による色んな旅行記等を見て、こんな凄いことをやったのだというわけで、すっかり書かれた記録に夢中になりましてね。数年間は授業が終わると図書館通いをずっとしました。そういう大事業をやった東亜同文書院というのは一体どういう学校だったのだろうということへも興味を持って、書院そしてそこから誕生した愛知大学の学校史と言いますか、そういう原点を持つに至ったというわけです。ちょっと話がずれましたけど、元に戻って。荒尾精は尾張藩。お父さんは下級士族。明治維新の時に、当然もう職業がなく、お父さんは失業しますから。一家総出で、東京で金物屋をやったのです。ところが、武士の商法で失敗して一家離散をしまうのです。その時に 10 歳あまりの荒尾精が家族の中で一番目立って優れていた。行動もテキパキしているというわけで、近くの麴町警察署の所長であった菅井誠美、この人は後に栃木県知事になっていく人ですけど、その人が警察署の書生になれと言って、彼を警察署の書生に招き込んだわけです。初めて入った書生として警察署の中での議論は、当時は明治の最初でしたから、対韓国、対朝鮮です。日本は明治維新で港を国外へ広く開いたけども、隣の韓国は絶対



に開いてくれない。だから交易ができない。こんな国はけしからんという議論が非常に強くて、後に西郷隆盛が大將になって朝鮮征伐なんて言い出して、最終的には欧米から帰ってきた大久保利通など明治政府のトップの人たちが海外で得た国際感覚によって止められたのに、それでも聞かなかったから、明治政府の新しくできた軍隊と薩摩と長州藩の部隊とが衝突して西南戦争になり、西郷軍はそこで敗れるわけですけど。

荒尾精はその議論の中で何故、朝鮮が港を開かないかというその背後に清国がいる、朝鮮半島は清国がコントロールしているということを知るわけです。そこで、そういう清国というのはどんな国なのかということ初めて関心を持ったのです。荒尾精は、それまでは名古屋と東京だけの世界だったので、初めて日本以外の隣の朝鮮及び清国という国際性を意識の中で持ったわけです。清国はそういう国だということはどういうことだろうということで、関心を持ち始めていきますと、清国が欧米諸国によって非常に蚕食されているという実態を知るわけです。何でそんなふうになったのだろうかということをも勉強していくわけです。当時、教育制度はまだ不十分でしたから、警察に入った荒尾は学びの場を次の軍隊の学校に入っていきます。最終的に

は陸軍大学校がオープンした時に、ちょうどそれにぴったり合うような年齢だったので、陸軍大学校の卒業生になってく。その時に1年<sup>としよう</sup>上に根津一がいたわけです。

両者は非常に仲良くて、根津は荒尾のいう日清両国間の相互貿易で両国が豊かになるという構想に惚れ込んで、荒尾を非常にサポートしていきます。だから、荒尾亡き後、根津は東亜同文書院の院長に60何歳まで就任して責任を果たしていくわけです。そういう大きな流れが最初の段階であったのです。

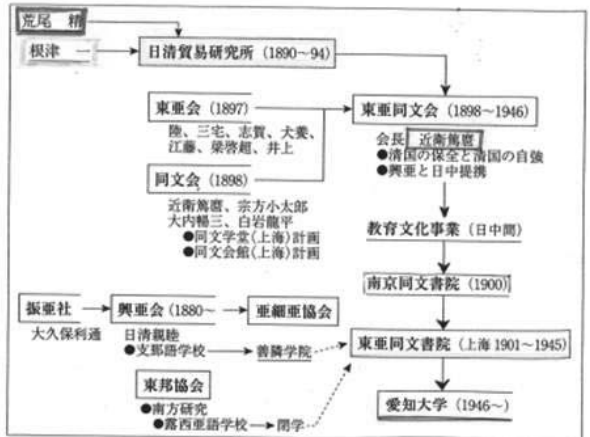


図 4 荒尾、根津、近衛から東亜同文会、東亜同文書院そして愛知大学への系譜

そこに参考図があります (図 5)。下が名古屋から西枇杷島へ行く所の橋です。手前のほうが枇杷島。枇杷島というのは皆さんご存知のように、今もそうですけど、当時は農村市場、市場の町です。江戸時代は名古屋市場を相手にした農村のあちこちにできた市場町の大手です。その右手に市場町の風景を描いた絵図があります (図 6)。こういう野菜を持ってきては農家がそこで売るわけです。この研究を始めた頃は当然、荒尾精に関心を持っていました。そしたら、枇杷島

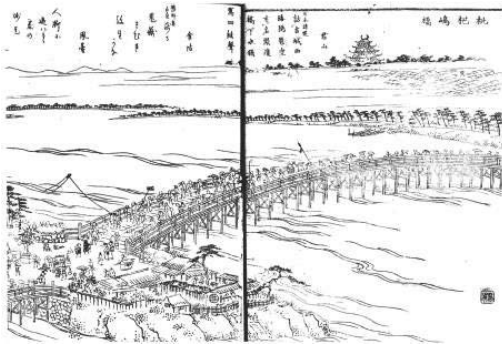


図5 名古屋城下と枇杷島(手前)をつなぐ橋の賑わい

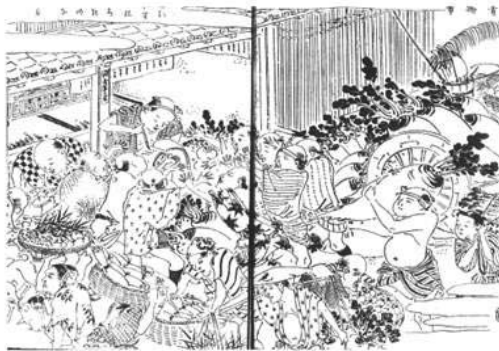


図6 枇杷島の市場町の賑わい

町の歴史研究会という方々から私のところへ荒尾精に関する講演依頼がきたのです。えっと思っって行ったのです。50人ぐらい集まられた盛大で熱心なグループでした。そこでは荒尾精は枇杷島出身であると主張し、郷土出身の偉人であるという。そんな非常に熱っぽい雰囲気の中で講演をしたことがあります。一方の説は名古屋の西区生まれである。名古屋での最後は本学の車道校舎の近くで住んでいたのだと。そういうような流れもあります。偉くなると色んな人々が自分の出身地だというふうにサポートしてくることがあると思います。荒尾はまさにそういう人だったわけです。

荒尾は清国を色々自分なりに研究して陸軍大学が終わった後、参謀本部に入ります。そこで清国研究というのをやるわけです。

ちょうど熊本へも駐在した時に、清国から帰ってきた御幡雅文という陸軍の人から中国語を教えてもらったりして、さらに清国志向への磨きがかかる。熊本へ行った時、本部へ戻って、清国へ行かせて欲しいというのを願いますけど、まだお前には早いと言われて、参謀本部の支那課というところへ配属され、地図とか色んな清国の関係書類に囲まれて勉強したわけです。その上でようやく清国へ行ってよろしいという許可をもらったわけです。

ところが、もらったとしても清国のどこへ誰に行ったらいいものかという問題が出てきたわけです。

## II 岸田吟香

その時に彼が是非お願いしたいと言ったのが、レジュメの下の図にあります岸田吟香です(図8)。私は、当時大学で、今はもう辞められた山下さんという事務方の課長職の人が、東亜同文書院と愛知大学というシリーズ物を出したいというプランに乗り、原稿を至急書いて欲しいと言う流れの中で書いていた最中に、新幹線に乗ったら、当時はバブルの景気の良い時でしたから、週刊誌や新聞がいっぱい車内に残っていたのです。



図7

目の前の椅子の上の週刊誌を広げたら何と岸田吟香伝というマンガが掲載されていたのです。これが講談社の雑誌で、すぐに講談社に電話してこのページ、この図です（図7）。これを利用して欲しくないかと伝えたら、1冊できたのを送ってくればよいですよ、という返事だったので載せてもらったのです。これは愛大刊の冊子体の本の中に収められています。この右側にあるのが、図8番のところですね、若き岸田吟香。右下にひげを生やしているのが大きくなってからの岸田吟香です。



図 8

この2人をお話すると、また時間がなくなってしまうほどですが、岸田吟香は岡山県の山の中、美作国の小さな片田舎生まれ。しかし、面白いことに愛知県今の豊田市、旧挙母藩の時代の飛地の領地だったので。そこで育って。隣が美作国の津山藩。津山藩の領主も彼の存在を知るほど吟香はよく勉強していた子供でした。漢学に長けていたのです。それで津山藩のほうへ出てこいと招かれ、そこの藩の学校に入って、合わせてプロの人から竹画も練習するのです。竹画、バンブーの絵です。これがこの人にとってはのちに非常にプラスになります。当時の

中国の人たちはそういう竹の絵が大好きなのです。だから、のちにヘボンと清国へ渡って彼はすぐその竹画を描くことで上海にコミュニティを作っていくのです。そういう才能を発揮するのです。その前段階で、彼は非常に優れているから、さらに藩から江戸の昌平黌へ送られます。今で言うと東京大学みたいなところ。幕府直轄の。大学へ行って先生をやるのです。そこで水戸藩など色々な藩から出てきた武士の人たちに教育するわけです。漢学を中心とした教えです。そこでも色々な人たちと知り合った。しかし、幕末は長州側と幕府側で意見が食い違ってきて、吟香はそういう点から言うと、どっちについてもこれは危ないというわけで藩籍を抜いて武士をやめ、色んなところで商売、仕事をするわけです。例えば、群馬県まで行って温泉地で三助さんをやるとか、色々なことをやった。勉強が好きです。そのため当時はロウソクの灯りで勉強しました。その結果、眼を悪くしてしまいます。日本は当時眼の悪い人が多かったのです。

その時に知り合いから横浜へ行けばヘボンという宣教師がいる。正式にはヘップバーンという名前です。「ローマの休日」という人気を博した映画のヒロインのヘップバーンと親戚関係にあるらしいですけど。ヘボンは日本のローマ字を作った人です。そこへ行って眼の治療する過程で、当時武士など上層部のほうの言葉はヘボンが収めたけど、庶民の言葉が分からない。それを吟香がカバーしたわけです。和英の辞書の編纂をすすめ、辞書を編纂してやがて完成したけれど、日本には活字がない。そこで上海のイギリス租界に2つのカトリック系の印

刷屋があるというわけで、そこへ行って金属の活字を組んで辞書を作っていたのです。彼は横目でヘボンが作っていた薬の作り方も全部マスターして上海で辞書づくりを行ったのです。上海では色んな本屋さんを回って古典も含めてたくさん買いこんで関心を広げました。それが商売に出来るということで、帰って来て銀座で目薬と本屋を開き、上海にも同様の店を開いたわけです。そういうことで上海の活躍ぶりから、日本で言うと国際商人第 1 号と言いますか。そういう人だったのです。

荒尾は上海へ行くにあたって、吟香が上海にいる時にすぐ訪ねて行った。ところが、吟香はそういうような経過があったから、政府の役人とか軍部とか警察とか嫌いだったわけです。荒尾が軍部から派遣されてくるということに対しても常に抵抗があったわけです。戦前はこの荒尾と吟香の出会いは大変有名な話だったため、色んな戯曲がそれを巡って書かれていて、そういう戯曲の内容を見ますと、みんな同じところが 1 つあって、最後に吟香をいかに説得したかという場面で、何回目かに吟香を訪ねた時、自分のポケットからピストル出して、吟香の隣にある鉢をぶち抜いた。このぐらい決意がありますということを示して、それで吟香は納得。『よし、分かった』ということで荒尾に色々教えてくれることになったという筋書きです。上海では色々コミュニティーを作っていましたが、上海は租界です。吟香は、ここだけでは中国の実態が分からないから、長江の上流の全国とつながっている漢口へ行きなさい。その漢口へ行って、そこで薬を売り、本を売り、商売をしながら清国全域の情報を集めなさいとす

すめたのです。ところで、それより先に、西南戦争があって、新政府軍に敗れた鹿児島県や熊本県の若い連中は、これからお上には、政府には登用されないというようなことで清国へ行くのです。また、長州藩に虐殺と言ってもいいほどこてんぱんにやられた会津の若者たちもです。私も会津で調査をやったことがあるけど、非常に可哀想でした。その若者たちも同じ思いを持って大陸へ行ったわけです。行った時に日本人を訪ねるところがないから、岸田吟香が作った上海の楽善堂と言うのですが、そこへ集まり、その建物が日本人青年たちのたまり場になっていったのです。荒尾はその人たちを漢口へ呼んできて、そこで一緒に調査活動をやるわけです。この辺を話すと 1 時間ぐらいかかるので、それぐらいでカットしますけど。

### Ⅲ 漢口楽善堂でのフィールドワークと『清国通商綜覧』

そこで多くの人たちが荒尾精の構想力に従って各地へ出掛けて行って地域調査をやるのです。言葉が十分じゃないから、そういう人たちは怪しまれると、当時の清国で殺されてしまうのです。半分ぐらいの人は行方不明か殺されてしまいます。そういう非常に過酷な状況があったのです。残りの人たちが彼の言うことを聞きながら色々情報を集めた。荒尾精も自ら足で歩いて頑張り、『清国通商綜覧』という 2000 ページの本を書きます。これは清国と日本が貿易をする上で何が必要か。どういう状況があるかというのを日本側から書いた本です。最後は根津一が編集してそれを出版するのです。本日は、せっかく図を作ってきましたから

ご覧下さい。左の真ん中の下のほうに有名な麗子像というのがあります(図7)。これは岸田吟香のお子さんで、岸田劉生という絵描きさんの作品です。

この麗子像を描いた劉生がお弟子さんをとって、育てられたのが何という偶然か、ちょうど豊橋の豊川堂書店の経営者高須家の1人高須光治だったのです。その人が絵を勉強して、日本でも活躍した。戦後、愛大ができる時に中国から帰って来て、愛大のロゴマークを書いてくれたのです。真ん中の図9番です。最近のロゴマークは三角形のようなロゴですけど。これは非常に無機質で、そこから歴史はうかがえません。私としては、愛大というのが最初に岸田吟香経由の伝統を活かしたロゴを使用していたので、是非今後もこれを尊重して使用して欲しいと思います。中国に行くとき愛大の今のロゴの形は自動車で不法駐車用のパンクの注意報のサインみたいなものなのです。私は愛大のここにある歴史的なロゴがいいのではないかと思います。

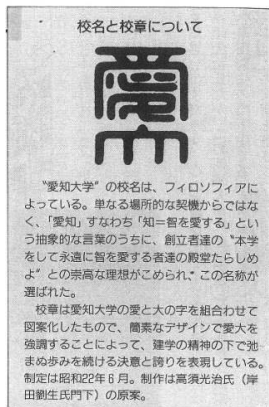


図9

それで話を先に進めますと、荒尾精を慕った多くの日本人の若者が大陸でグループ化できたわけです。彼らが中心になって色んなところを調査したのです(図11・図12)。



図10 荒尾精(前列中央)と漢口薬善堂の同志たち

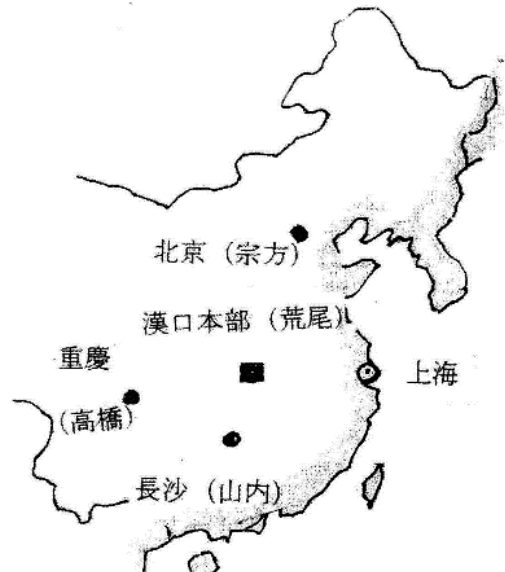


図11 漢口薬善堂の本部と3支部の分布及びそれぞれのリーダー名

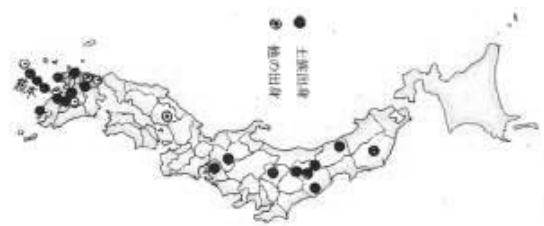


図12 漢口薬善堂における堂員の出身地分布

色んな所へ行って現地調査をして荒尾精をサポートした。荒尾精としては、日本との貿易取引を目指していましたから。弟子たちにあちこち各地に行かせて関連情報を集め

させたわけです。図 12 が漢口樂善堂における当時のメンバーの出身地が書いてあります。西南日本の九州から会津の人たちが主で、それに愛知からも少し行っているわけですけど。こういう人たちがそれぞれ情報収集をした。こうして前述の『清国通商綜覧』という 2000 ページもある大作本を出すのです。それまでの日本人の中国に対する常識というのは、漢詩、漢文の世界だけです。実態というのは分かってなかった。それをここで実態として紹介をした時に、日本人の多くはびっくりしたわけです。清国も非常に階層社会だし、中以下の部分というのは表に出てこない。そういうところも明らかにしたものですから。この著作はベストセラーとなり、大変評価を得たわけです。そういう中で 4 年ぐらい過ごすわけです。膨大な情報を集めてきて、さっきの『清国通商綜覧』という本に変わるわけですけども。荒尾精はさらにそれをベースにして本格的な学校を作りたいと構想したわけです。

#### IV 日清貿易研究所

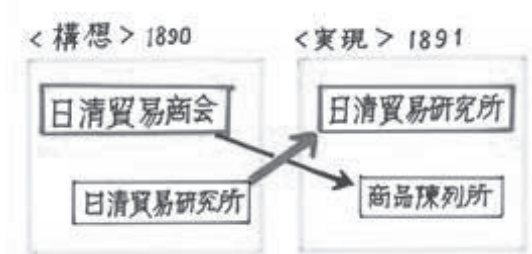


図 13 当初案「日清貿易商会」から「日清貿易研究所」への浮上

もう 1 つは会社。貿易のできる会社を作りたいと思ったわけです。それが一番右上のところにあります (図 13)。狙ったのは「日清貿易商会」という名前です。それをサポートするのが「日清貿易研究所」としたの

です。ところが、荒尾が日本からいざ上海へ出発する時に、国がサポートを全面的に約束してくれていたのに外されちゃったのです。突然の政権の交代のためです。色々サポートして日本からも多くの輸出品を清国へ出すというようなことも踏まえた道筋が閉ざされてしまったのです。最初の年は学生を各地で順調に募集をし、入学したのです。一番下のほうに図 14 があります。卒業生の写真です。本来は 150 人入れたのですが、学生たちの面倒を見きれなくなったのです。



図 14 日清貿易研究所の卒業生(1893 年)

慌てて色々な人にコネクションを作って、お金を出してもらって、最初の年は何とかクリアしたのです。2 年目になると少しサポートしてくれる人も出てきたものですから。2 年目の授業もできるようになったのです。

しかし、最初にありますような「日清貿易商会」というような会社までは設立できないということになり、それをサポートする位置づけであった「日清貿易研究所」、これは学校なんですけど、図 13 で示した右上のほうの「日清貿易研究所」というように独立させて、そこで貿易実務をやるという学校にして、その学生として貿易実務をトレーニングしていくと変更したわけなのです。「日清貿易商会」が最初に描いたプランは、



矢印の右下にありますように商品の陳列所へ変更したのです。こんな商品がありますよというかたちで、貿易取引の実践的なことを3年間ぐらいかけてやったわけです。その時のカリキュラムが図15です。ここではたくさんの科目がそろっているわけじゃありません。この時期ではまだ日本では清国研究、中国研究というようなものはまだ熟していなかったところもありましたから。しかし、懸命に科目をそろえて2年目にはここで学生を育てていった。その中にフィールドワークも入ってくるわけです。



図16 日清貿易研究所卒業生の出身府県分布  
(1黒丸が1人を示す)

合計	体操 6	臨時講義 1	商務実習 1	習字 1	法律学 1	経済学 3	商業算 2	作文 1	和漢文学 2	史記学 3	支那商業 3	商業地理 6	英語学 12	清語学 12	科目	期限	日清貿易研究所生徒第1年学科予定表	
																	前 半 学 年	後 半 学 年
40	兵古式	心算上	楷書												時間週	前期	後期	
43	同	同	同												時間週	前期	後期	
44	同	同	同												時間週	前期	後期	
48	同	同	同												時間週	前期	後期	

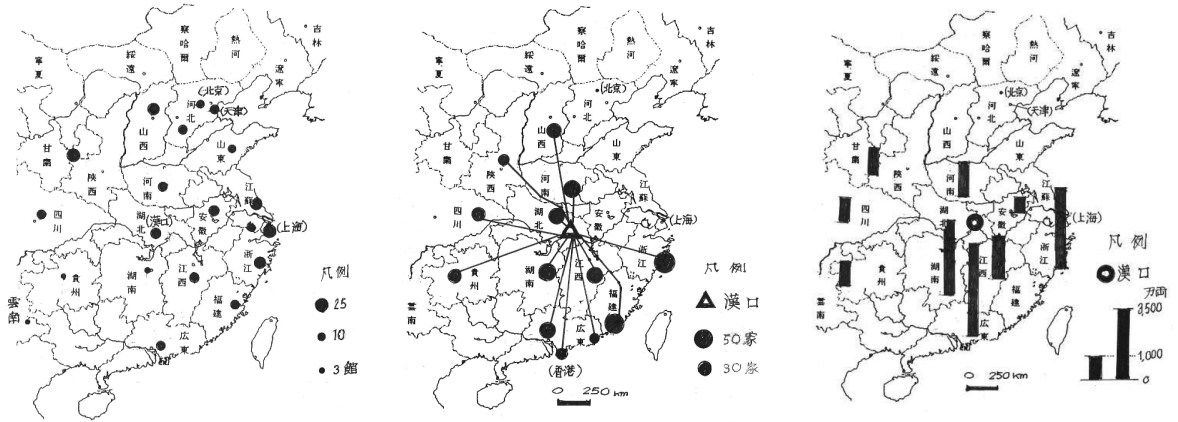
図15 日清貿易研究所第1学年履修学  
科目予定表(『沿革史』より)

そのすぐ下の図16かな。ここのところは、どういうところからやってきた学生が多かったかということです。九州が圧倒的に多いです。中部地方から西のほう。中部から東北のほうは少ないですけど。これには色々理由があったのです。その話をすると今日は時間がなくなってしまうので、ちょっと話せないですけど。九州を中心にして多くの卒業生がここで卒業したというわけです。

### V 会館と公所

その経過の中で、荒尾精が中国のあちこちを回って、自分でも調べたりした研究の中に、その図17のタイトルのところで「会館」と「公所」というのがあります。これは日本では知られていなかった清朝の商業組織です。日本も徳川時代の土農工商というランクがあり、商人が一番下のランクでしたけど。各藩は御用商人みたいな形で彼らを雇って結構商人を高いレベルで扱っています。実質的には農民が一番下に抑えつけられてしまっていたのですね。清国のほうはそれがもっと深刻というか、はっきりしていて、商人たちは最下層なのです。知られていなかったですね。最下層だということはどういうことかと言うと、商人の人たちが自分たちで商売をやって、それを全国に広めようとするのと自力でやらずにちゃいけない。その時に地域の共同体でもって各地へ進出しようというプログラムを組んだのです。それは政府も軍隊も一切商人

図 17 荒尾精がフィールドワークで初めて知り、紹介した「会館」と「公所」は地域システムであった



[17-1]

省別・都市別「著名な」会館「公所」  
分布図(『支那経済全書』第2輯データ  
より 藤田作成)

[17-2]

漢口へ出荷する省別商人(家)の数の  
分布(『清国経済全書』のデータより  
藤田作成)

[17-3]

漢口との省別取引高の分布  
(『清国経済全書』のデータより 藤田作成)



図 18 「清国通商綜覧」中に紹介された府県名  
などの分布(藤田作成)

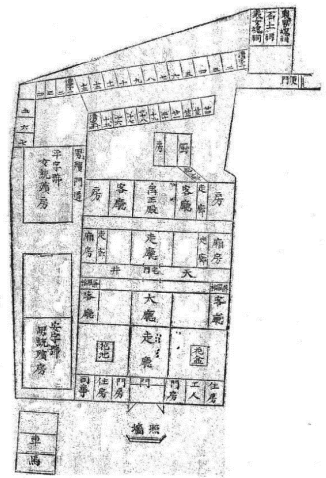


図 19 上海湖南会館平面図  
(『支那経済全書』第2輯より)

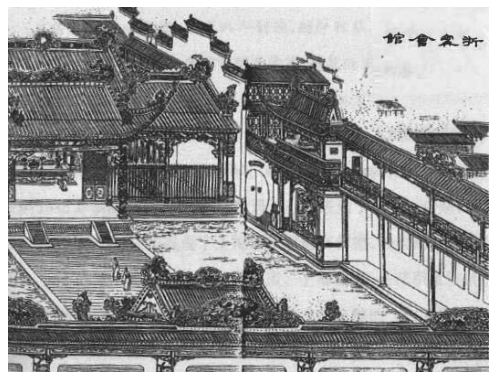


図 20 上海の会館建物例

図 21、図 22 【付年表】 東亜同文書院および同大学（旧制）の歩み

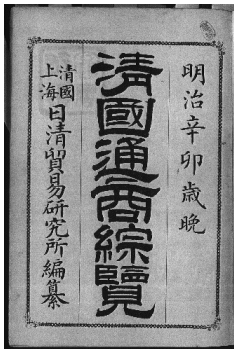
図 21

1880年（明治13）岸田吟香が上海へ  
 1886年（明治19）荒尾精が「漢口楽善堂」開設  
 1890年（明治23）荒尾精が「日清貿易研究所」開学  
 1892年（明治25）『清国通商綜覧』刊行  
 日清貿易カタログが人気、ベストセラーへ  
 1894年 日清戦争勃発 >> 外国貿易への関心  
 1898年 「東亜同文会」結成  
 1899年 近衛篤磨が劉坤一と会談  
 「東京同文書院」開学  
 1900年 「南京同文書院」開学

図 22

1901年（明治34）上海に「東亜同文書院」開学、根津一初代院長  
 1902年 日英同盟締結  
 1904年 日清戦争始まる  
 1905年 書院生5名が西域調査へ（～1906年）  
 1907年 書院生「大旅行」調査へ（～1942、専門部は～1943）  
 1911年 辛亥革命  
 1916年 「支那省別全誌」全18巻刊行開始  
 1919年 中華学生部校舎完成  
 1921年 専門学校令指定（高等商業学校）  
 1937年 徐家匯校舎全焼（第2次上海事変）>長崎へ  
 上海交通大学校舎を借用  
 1939年 「東亜同文書院大学」（旧制）へ昇格  
 1943年 附属専門部設置  
 1945年 『新修支那省別全誌』全23巻中断  
 富山県に呉羽分校開設  
 1946年 最後の院長、学長の本間喜一ら一行帰国し、  
 豊橋市に『愛知大学』（旧制）設立認可され誕生

図 23



『清国通商綜覧』構成(抄): 日清貿易研究所刊. 全3巻. 2000頁 / 892年刊

目的: 清国の商業事情紹介 → 初の中国の実態を知る書としてベストセラーに

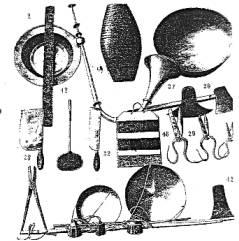
第1編

商業地理  
 庶業  
 運輸  
 金融  
 文通  
 生業  
 雑記

→ 清国全体の位置、面積、人口、地形、山脈、河川、海岸線、  
 各18巻についても同様の地理的条件  
 さらに麻港15港と香港が付加。  
 ほかに気候、風俗、教育、宗教など、日本人の手になる本格中国地誌  
 → 12章から構成… 政治組織、財政、税制、郵政。

第2編  
 第3編

→ 11章から構成  
 多様な商業組織  
 訪問や宴会の特徴  
 借居方法、居住慣習  
 ほか、旅行上の注意  
 商品カタログ(見事な銅版画)多数。  
 (中国史、商工業史、農業史、ほか)



『清国通商綜覧』で紹介された清国の銅製品図

図 24

を保護しないというかたちなのです。その図 17-1 は、そこにあるように、そのあと書院が開学し、初期の学生のフィールドワークの成果をまとめた『支那経済全書』というのを荒尾精等が編集して全 12 巻分を刊行しますが、その中で取り上げられた会館等の名前をピックアップして分布図にしたものです。結構散らばって各商人たちが自前で、あるいは他の町に行ってそういう組織を作って、商人だけで独立して商売やろうとしたわけです。その「会館」と「公所」とは少し違うところもあるのですが、「会館」は同郷の出身者で、色々な商業組織の集団なのです。「公所」というのは業種別集団です。石屋さんなら石屋さんだけ。金物屋さんは金物屋さんだけとか。そういうような職業を組織して作った。真ん中にあるのはその出身地の図です。中央が漢口。当時の中心地は上海ではなくて漢口だったのです。そこなのです。漢口はその周辺と非常に大きな取引関係を持つようになって、漢口が中国の商売をほとんどコントロールするような時代が続いていたわけです。

日本人で初めてこのような組織の存在に気が付いたのが荒尾なのです。荒尾精はそこから多くの情報を得て、一番右の図 18 っていうのがありますが、各省から色々な情報を得て、それぞれの商売のやり方なども整理して、これを前述した『清国通商綜覧』という 2,000 ページの本にしたのです。その中に商品のカタログもいっぱい載せたわけです。一番後ろの右下の図ですね(図 24)。銅製品のカタログ。中国と取引するところというような商品がありますよというのを示したわけです。荒尾精はそういう経過の中で何が一番中国との貿易をこれからやる上

で決め手になるのかを示したわけです。特に中国との貿易を、荒尾精は非常に重要視した。清国と日本が貿易をやればウィンウィンの関係になって、列強に対して非常に強い抵抗力を持てるのではないかと。そういう発想があったわけですから。彼は次のような調査をやった。図 23 のところですね。この書の目次のところで、一番上のところで「清国に商業事業紹介」という目的を示し、第一編から第三編まで全 3 冊本にまとめ刊行したのです。

その第 1 冊本が商業地理とかその関係諸制度、運輸とか金融とか交通とか。上の欄はまともな色んな項目ですけど。「雑記」のところでは何を書かれたかって言うと、そこにあるように中国ではどんな商業組織があるのか。これは誰も知らなかった世界への言及です。また営業訪問とか宴会というものどうやって活用したらいいのか。非常に実践的です。借家を借りる方法とか住み方の慣習はどうであるとか。ビザをどういうふうに取得するか。旅行中の注意はどういうふうにしたらいいのか。右のほうには色々な銅製品のカタログ集を沢山作っていて、しかもこういう形で中国の中で市場取引が行われていると知らせている。右のほうの図 24 というのは、次の第二編の商品カタログですね。第三編は、中国史とか商工業史とか中国のビジネスの根底部分の経済史です。これをずっと資料として集めて、自分も編集して出版する。以上のような内容で、こういう大きな 3 部作で『清国通商綜覧』というのを出版したのです。これを出版するにあたって荒尾精は、前述したように「日清貿易研究所」というのを立ち上げたわけですけど。そこから出版するっていう

かたちで新たな学校とともに日清貿易の重要性を世の中に問おうとしたわけです。荒尾精が当時の清国における商業組織をみて、清国では日本も江戸時代はそうでしたけど、やっぱり階層的に言うと土農工商で自分が最も対象にしようとしている商が一番下で、政治家、各省のお役人の人たちからも面倒は一切見てもらえなかった。商人たちは放置されていた。だから商人らは自前でもって何とか生きていかなくちゃいけないと自立の組織化をめざしたことで、だから華僑の人たちが東南アジアへ行ったのも、そういう組織を作るって意味で、東南アジアに出掛けて行って自分たちの故郷の出身者を招き入れる形で教化したことを知ったのです。これは大変だと思いつつ、その世界を明らかにすることに興味を持ったということだと思われます。自力だけで何とかしようとしてきた清国の商人に荒尾精は気が付いたわけです。それにはきちんとしたビジネスを学ぶ学校が必要だと。

こうして清国の商人世界を『清国通商綜覧』の中で、世界で初めてこれを清国外へ紹介したわけです。清国にこういう組織がありますよという入り口は見えた。しかし、その細かいところまでは分からないので、この後を受け継いだのは東亜同文書院の学生たちが現場へ入って、全部ではないにしてもこういう新たな商業組織の研究を期待したのでしょう。学生たちにとっては新たなこの商業組織をとらえ、これらを研究しようとしたわけです。さっきの図に戻ってもらいますと、図 17 はそういう学生たちが作ったりしたデータから、私のほうで作った商業ルートの一端です。真ん中を見ていただきますと、当時の商業活動を中心として

一番みんな狙ったのは漢口です(図 17-2)。まだ上海は開港不十分でしたから。漢口が全国を中心だったわけです。漢口は例のコロナの発祥地でありますけど。ここへ皆が行って、ここで清国中も見ながら、どういうマーケティング方法をとるべきかということを一生涯懸命やっていたわけです。

こういう商業組織が存在することは日本では知られていなかった。20 世紀の最初になってから欧米の人たちが清国の北京へ入ってきて、その中で中国の社会を分析する人たちも出てきて、初めて 20 世紀の最初にこの存在を知りますけど。ただ、それは北京だけの話でした。他の町はほとんど手が及んでいません。例えば、この図で言いますと浙江省というのは台湾の近くにありますが、この浙江省の財閥が今の中国を牛耳っています。そのもとはこういう時代の中で浙江省の商人連中が各地へ進出して、そこで自分たちの勢力範囲を拡大したというのが背景にあります。

蒋介石は政権をとると、民国期の時にこれは面白い、商人組織を政府とつなげられないかということで、日本の商工会議所を勉強して「商工会議所」を民国各地に作るわけです。しかし、必ずしも上手くいかなかった。さらに戦後の毛沢東政権下になると、政権以外に民間人が独自に組織化してしゃしゃり出るというのは独裁政権にはなじまないとして、一斉に消去してしまった。潰したのです。しかし、潰してもこういうネットワークの流れというのは、その後もその根底で生きているわけです。それが現在の中国商業の地域間取引で、国内を支えるネットワークになっています。そういうネットワークの一番のベースになっているわけです。

そういう意味で荒尾精が初めてこれに気が付いて、それを次の書院の学生たちに申し送りをして研究させてきたというのは、非常に画期的なことだと思います。実は私、この年になって文部省の科研費 3 年分というのをもらっているのです。その研究はこれなのです。この 3 枚の図が昨年度に発表し、紹介した図です。なお、右のほうの図 18、荒尾精という人は凄い人ですね。滞在中に清国のあらゆる県の情報を得て、『清国通商綜覧』の中に入れていたのです。自ら 3 年半、現地で色々商取引を中心にして調査をしたのです。日本人には長く気が付かなかった世界をです。さらに言えば、それが 1901 年に設立された東亜同文書院における「大旅行」と称した地域経済の把握へとつながったのです。

### おわりに

欧米人にも気が付かなかったのですが、荒尾精による中国の商業組織の発見、認知は非常に大きな功績だったと言えると思います。だから、日清戦争が起きる時に荒尾は猛反対します。その時の住まいがここ若王子神社前なのです。この神社の正面です。くり返し戦争反対と勝利後の賠償金や領土の割譲にも猛反対している。しかし、国民からは勝ったのだから賠償金をとれ、領土をとれというような要求が盛り上がる中、そういうものをとるべきではないと主張します。何故かと言うと、それは一般庶民から税金を取り立てることになる。そうすると自分が計画している両国間の貿易という仕組みは成り立たなくなるし、日清間のウィンウィンの関係は不成立になり、逆に清国国民の生活ベースが低下してしまうというわけ

でくり返し猛反対したのです。結果的にはそういう思わぬ国民からの強い要望に押し切られ、それが通ってしまった。新領土となった台湾では、日本人のそういうマネジメントに現地商人たち皆が抵抗していることを知り、そこで、自分が自ら乗り出し、自らの手で友好の決着をつけようとしたわけです。彼はその後、単身で台北へ乗り出して、向こうの商人たちと場を持つようにしていったわけです。しかし、残念ながらそこでペストにかかってしまって 1 週間後に亡くなってしまったのです。実に 38 歳の若さだったのです。もったいないです。後年、荒尾の実践的功績を知った篤麿は荒尾への追悼文の巨大な碑をここに建てて荒尾精を悼んだわけです。しかし、篤麿もその後 42 歳で亡くなってしまいます。その時の息子が戦時中の総理大臣の近衛文麿です。当時 14 歳でした。だから、親である篤麿の教育が文麿には行き届いていなかったといえます。もう 10 年長生きしていたら、文麿も父からのトレーニングを積んでいただろうし、また荒尾精がもう 10 年でも長生きしていたら、太平洋戦争が行われたかどうかは分からないですね。そんな思いを碑の前で抱きつつ、時間を忘れて言葉がはっきりしないまま時間が来てしまいました。時間が来たのでこれにて終了させていただきます。ご清聴ありがとうございました。